慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代言語学の概念形成 : エミール・ バンヴェニストの草稿研究
Sub Title	Formation of metalinguistic concepts in modern linguistics : studies on the manuscripts of French linguist, Emile Benveniste.
Author	小野, 文(Ono, Aya)
Publisher	
Publication year	2013
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2012.)
JaLC DOI	
Abstract	資料調査として、パリ国立図書館(BNF)とベルン大学言語学研究所でバンヴェニストの草稿資料の一部、ならびに蔵書目録の一部を得ることができた。資料を読解・ 研究した結果、バンヴェニストが冒瀆語や婉曲語といった特殊話法を、「言うこと」の一般的な力に結びつけて考察していたことが分かった。バンヴェニストの草稿に関する考察結果を二本の論文(和文と仏文)として学術雑誌に発表した。
Notes	研究種目 : 研究活動スタート支援 研究期間 : 2011 ~ 2012 課題番号 : 23820048 研究分野 : 人文学 科研費の分科・ 細目 : 思想史
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_23820048seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　5 月 31 日現在

機関番号：32612
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：23820048
研究課題名（和文）近代言語学の概念形成～エミール・バンヴェニストの草稿研究

研究課題名（英文）Formation of Metalinguistic Concepts in Modern Linguistics : Studies on the Manuscripts of French Linguist, Emile Benveniste.

研究代表者
小野　文（ONO AYA）
慶應義塾大学・理工学部・講師
研究者番号：00418948

研究成果の概要（和文）：資料調査として、パリ国立図書館（BNF）とベルン大学言語学研究所でバンヴェニストの草稿資料の一部、ならびに蔵書目録の一部を得ることができた。資料を読解・研究した結果、バンヴェニストが冒瀆語や婉曲語といった特殊話法を、「言うこと」の一般的な力に結びつけて考察していたことが分かった。バンヴェニストの草稿に関する考察結果を二本の論文（和文と仏文）として学術雑誌に発表した。

研究成果の概要（英文）：As per the documentary research, I was able to obtain some of Benveniste's manuscripts as well as the inventory of his personal library respectively at Bibliothèque Nationale de France and the Institute of linguistic studies of Bern University, Switzerland. As a result of the analysis of these manuscripts, I found that Benvensite had considered a special locution such as blasphemy or euphemy one of the general forces of the "enunciation". I published two articles (one in Japanese, one in French) on Benveniste's manuscripts in academic reviews.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：思想史
キーワード：近代言語学、草稿研究、バンヴェニスト

１．研究開始当初の背景

近年、フランスの言語学者エミール・バンヴェニストの草稿資料がフランスのパリ国立図書館で大量に発見されたことから、バンヴェニストの言語思想研究は、草稿資料調査が不可欠のものとなってきている。草稿資料は基本的に限られた研究者にしか閲覧許可されず、また複写も認められていないために、現地で資料調査・分析するしかない状態であ

る。フランスでは国立研究院に専門の調査チームが設けられ、研究代表者もその一員として認められた。

研究チームの一員となったことで、一部の資料の閲覧と複写が認められたため、国立研究院を通じて資料の複写を申請した。数ヶ月の時間を要したが、問題の資料（オリエンタリスト書庫ボックスナンバー52、封書ナンバー213）の全ての紙片（全113片）のPDFを手に入れることができた。ただし複写の質がよくなく、実際に図書館に赴いて見ることでしか資料分析はできない状態であった。

２．研究の目的

申請者の研究の全体構想は、近代言語学の基本的概念の成り立ちを明らかにすることである。そのなかで本研究の目的は、バンヴェニストの草稿資料を詳細に分析することで、彼の提示した言語学の重要概念（「ディスクール」、「発話行為」等）がテクスト群のなかでどのように生成しているのかを理解することにある。そこから現代言語学の転換点を生み出した思想的背景を探り、近代言語学史に新しい流れを生み出した「発話行為」言語学の源流を辿り、またその問題圏の提示する問いを確定していくことを目的としている。

研究代表者は今回の研究で、特に「発話行為」と「冒瀆語」の関係に注目した。「冒瀆語」はいわゆる「罵り言葉」であり、ユダヤ＝キリスト教的文化では、禁じられた神の名を用いることがほとんどである。一見すると特殊な言語現象と思われるこの「冒瀆語」について、バンヴェニストは幾篇かの論文を費やしているが、それはバンヴェニストが「発話行為」という、「言うこと」そのものの重要性を見いだしていった時期と重なる。「冒瀆語」に関するバンヴェニストの考察は、「発話行為」の考察につながるものを提示しているのではないか、という仮説を立てて、「冒瀆語」に関する草稿資料を分析することとした。

３．研究の方法

１年目は資料調査を重点的に行った。特に『冒瀆語と婉曲語』論文の草稿がひとまとまりに保存されていることから、この草稿群を取り上げた。具体的には、まずバンヴェニスト草稿資料調査チームの協力を仰ぎ、国立図書館で当該資料の閲覧を許可してもらった。（時間を要したが一部複写も認められた）。その上で資料を解読、整理、分析した。

２年目は与えられた調査結果をもとに、国内外の学術雑誌に結果をまとめ、発表した。その際にはフランスの調査チームの主任教授の助言を仰ぎ、生成論的アプローチについて、また草稿資料の解読について、手を貸して頂いた。次いで、草稿とは別に、スイス・ベルン大学の言語学研究所が持つバンヴェニストの蔵書を閲覧し、蔵書カードを複写することでバンヴェニストの思想的・文学的源泉を探ろうとした。

今回の研究方法で分かったことは、バンヴェニストの草稿資料を調査する上では、国立研究院の専門研究チームの協力が不可欠だということである。このチームの一員となり、主任教授の協力がなければ、国立図書館でバンヴェニストの資料を閲覧することは不可能である。複写については、今回国立研究院の出版している学術雑誌に論文を掲載するということで、特別に113篇の紙片の複写が認められたが、これも主任教授の推薦を得て、バンヴェニストの著作権を持つ学術院が特別に許可したものだった。

しかし同時に、草稿資料の複写は、実際の分析にはあまり使用できないことも判明した。鉛筆書きのメモが多く、複写では読み取れないことがあったり、また白黒の複写であるため、ペンの色の違いを考慮することができないためである。より詳しい分析のためには、複写ももちろん必要ではあるが、何よりもまず直接草稿資料に目を通すことが必要であると分かった。

４．研究成果

（１）資料調査の結果として

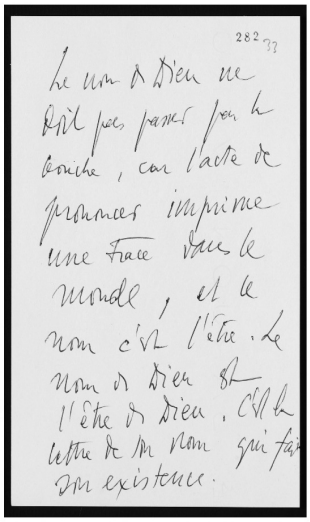
①パリ国立図書館・リシュリュー館のPapiers Orientalistes 書庫ケースナンバー52に収められている資料（『冒瀆語と婉曲語（Blasphémie et euphémie）』論文の準備メモ、並びに草稿）を複写し、解読した。『冒瀆語と婉曲語』論文の準備メモは、相当数見つかり、短い発表論文の背景にはバンヴェニストの地道だが膨大な研究量があることを明確にさせた。資料体は、読書メモ、論文アイデアメモ、論文準備資料、論文メモ、発表原稿草稿等、ほぼ完全な形で見つかった。フランス国立科学研究センター（CNRS）の草稿研究院（ITEM）を通じて複写を申し込み、受理された。

②スイスのベルン大学言語学研究所図書室に保管されているエミール・バンヴェニストの蔵書を閲覧し、紙媒体で残されている数千枚の蔵書カードを閲覧・写真撮影した。この図書館では、バンヴェニストの蔵書を、元々あった図書館の蔵書と一緒にして閲覧できるようにしている。バンヴェニストの蔵書のリストは存在せず、遺贈時に作成された蔵書

カード数千枚が残るのみである。半数ほどは論文の抜き刷りであり、また蔵書の一部はスイスの別の大学に移送されたとの報告が残っている。蔵書カードを写真撮影し、部分的に資料調査した結果、バンヴェニストの蔵書のなかに多数の哲学書・文学書が残されているのを発見した。バンヴェニストの持つ文学的・思想的源泉の一端をうかがい知ることができる資料として、活用する予定である。
③その他、エミール・バンヴェニストとローマン・ヤコブソン間で交わされた書簡を２通、入手した。入手にあたっては、ボストンのMIT図書館ヤコブソン書庫の専門員に資料調査を依頼した。該当する書簡の複写を送付して頂いた。書簡の内容はヤコブソンが送付した言語学の著作に関するバンヴェニストのコメントであり、特に音声学・音韻論の理論的問題について短く言及したものであった。

（２）資料を読解・分析した結果として
まずはバンヴェニストの草稿資料一般が持つ性格について、理解することができた。バンヴェニストの文体は簡潔で明快だと言われるが、ロラン・バルトが指摘するように、そこには「言外の含み」もまた感じられる。今回、短い決定稿の背後に大量の草稿の存在を知り、その資料を綿密に読解した結果、バンヴェニストの文体が持つ独特の「切り詰められた書き方」の謎がとけたように思う。
バンヴェニストはまた「冒瀆語と婉曲語」論文の調査のために、中世の文学作品（特に冒瀆語や婉曲語が多数使用されている作品）を丹念に読み、読書メモを残している。それだけでなく、バタイユやアルトーといった文学者が言語的タブーや冒瀆語に関して言及している文章の引用メモも草稿中に見受けられる。実際の決定校に残されている参考引用文献は聖書とフロイトのみであるため、草稿中に多くの文学作品に関するメモが残されているのは驚きであった。
「冒瀆語と婉曲語」の草稿資料を読解・分析した結果、「神の名」に関する冒瀆語・婉曲語を生み出す「ことばと人間」の関係を、当時の言語学の潮流に逆らって、バンヴェニストが言語学の中心的な主題として扱っていることが分かった。また「発話行為」の概念が、「言挙げ」という宗教的・儀式的意味をもった行為と深く結びついていることも理解できた。発話行為、すなわち「言うこと」は、言われたことを存在に結びつけ、その存在を肯定する力となる。そのような意味で、否定文も元々はある存在の肯定とならざるを得ないとバンヴェニストは強調している。ここでは「冒瀆語」という一見特殊な言語事象を通して、バンヴェニストが「言うこと」一般に関して省察を加えているのを見ることができる。

特筆したいのは、決定稿では跡形もなく消去されているメモ No. 282 の重要性である。


282 77
Le nom de Dieu ne
doit pas passer par la
bouche, car l'acte de
prononcer imprime
une trace dans le
monde, et le
nom c'est l'être. Le
nom de Dieu est
l'être de Dieu, c'est la
lettre de son nom qui fait
son existence.

／神の名は口にのぼってはならない、なぜなら発話する行為は世界に痕跡を残すからであり、そして名とは存在であるからだ。神の名は神の存在である。かの名の文字がかの存在を作り出すのである。／

ここで提示される「言うこと」の特質は、存在に対する「肯定的な力」である。ことばの本質は何かという問いに対して、バンヴェニストは様々な箇所で幾つかの答えらしきものを出しているが、この「冒瀆語と婉曲語」でバンヴェニストが到達する思考は、「ことばは肯定する力である」という言明である。発話行為は何かを言い表すゆえに、その何かをこの世に出現させる。「言う」行為は、それが罵り言葉でも誓いでもなく、どんなに些細な言葉であっても、「存在」へと導く恐るべき力を秘めているのである。この奇跡にも近い力を、バンヴェニストは「言う行為」という最も人間が日常的に行っている行為に認めているように思われる。
この思考は、ヨーロッパだけでなくアジアにも広く認められる「言挙げ」の思想、「言霊」思想に結びつく。そのような意味で、「冒頭語」「罵り言葉」という特殊な言語現象を、フランス語の枠内で取り上げながら、バンヴェニストの言語思想が普遍的な性格をまとっていることに気づくことができる。実際、バンヴェニストは草稿のなかでエヴァンス＝プリチャードやポール・ドゥミエヴィルの著作を引用し、アフリカや中国の言語的タブーにも関心を寄せている。ここにはバンヴェニスト言語学の特徴的な性格、すなわち個別言語の特殊現象を見極めることで普遍性を引き出すという手法を認めることができる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 小野 文「エミール・バンヴェニストの草稿資料」『思想』（岩波書店）No. 1061, pp. 87-110, 2012 年。査読無し。

② ONO Aya, « Le nom c'est l'être » : Les notes préparatoires d'Emile Benveniste à l'article « La blasphémie et l'euphémie », *Genesis* (Revue internationale de critique génétique, ITEM), No.35, pp.79-89, 2012. 査読有り。

６．研究組織
(1)研究代表者
小野　文（ONO AYA）
慶應義塾大学・理工学部・講師
研究者番号：00418948

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし